

テレビ会議システムと mLearning の併用によるブレンド型日本語研修

西郡 仁朗

清水 政明

藤本かおる

1. はじめに

東京都では、産業労働局を中心にアジア技術者育成のプログラムが平成18年度から実施されている。このプログラムでは、アジア各都市の若手技術者を日本に招聘し、東京都にある企業や首都大学東京等で技術を習得してもらうことを主な目的としている。平成18年度については対象がベトナム・ハノイ市に絞られ、日本語学習歴のない研修生（今回は印刷技術者が中心）を受け入れることになった。企業等での技術研修現場では日本語が媒介になることが予想される。来日後にも日本語研修は行われるが、その期間は限られている。時間の有効な活用を考慮すると、来日前にも日本語の事前研修を行っておくことが望ましい。この事前研修の部分を本学日本語教育学教室が担当することとなった。

本報告では西郡(2006a)の構想と内容をもとに現実的施策に合わせて行われたテレビ会議システムによる遠隔対面型授業と、iPod¹を使用した mLearning²との併用によるブレンド型³日本語研修について報告する。

詳細な授業分析や教育効果の測定などは今後の課題とし、パイロットスタディとしての報告となる。

¹ Apple 社によって開発販売されている携帯音楽プレーヤーで、液晶画面付きのものは動画も見られる。語学教育でも使用されている。

² 携帯が容易な PDA、ポケット PC、携帯電話（携帯電話・PHS）、iPod などの所謂モバイル機器を媒体とする eLearning。

³ ブレンド型の学習(Blended Learning)とは学習者に合わせ異なるトレーニングのメディア（技術/・活動・事象）を組み合わせることを言う（バーシン, 2006）。本研究ではテレビ会議システムによる対面型遠隔授業と、iPod による mLearning という2つのメディアが併用されているためブレンド型と称する。

2. テレビ会議システムによる遠隔対面型授業

対象国であるベトナムには、日本語の教育機関もあり、現地での学習も可能ではあるが、今回の事前研修では遠隔教育に関する教育実験的な意味⁴もあって、ブレンド型の教育方法を採用することとなった。ただ、学習者の居住・勤務する場所は一カ所ではなく、また通信インフラが整備されテレビ会議が利用できる場所は限られ、研修の実施にはいくつかの困難があった。しかし、平成18年度は国際協力機構のJICA ネットの全面的な協力を得て、ハノイのJICA 事務所とJICA 東京の設備を利用することが可能となった。また、JICA 東京では送受信の技術者の配置も得、技術研修の一環として政府開発援助（ODA）ベースでの遠隔授業が実現した。国際協力機構の特段の協力がなければ今回の事前研修が実現しなかったことを、感謝とともに記しておく。



図-1 授業の状況1 (JICA 東京の教師側)



図-2 授業の状況2
(JICA 東京で受信したベトナムの様子)

授業のカリキュラムについては、原則的には西郡（2006a）に示した主教材内容に基づく計画であった。この教材は初級前半の内容で15ユニットからなり、90分授業16回程度の分量であった。しかし、実際には研修生決定が7月初めで来日が9月末、事前

⁴ 本学日本語教育学教室では今平成18年度、東京都アジアネットワーク遠隔教育プロジェクトの一環として、台北市立教育大学との間のブレンド型日本語学習（テレビ会議システムとWBTによるeLearningの併用）にも着手している。これについては藤本(2007)を参照されたい。

研修期間は7月初旬から9月下旬授業回数は8回という厳しいスケジュールとなったため15ユニットのうち、初めの10ユニットまでの範囲の学習に絞った。それでも11回分を8回の授業で行うというかなり密度の濃いものとなった(表-1参照)。また、教授法としては学習者の母語が全員ベトナム語であるため、ベトナム語を媒介とした語彙・文型等の解説を行い、その後、日本語だけによる練習の時間を設ける方式で行われた⁵。文字(ひらがな)に関しては自習を基本としている。

今回の研修ではハノイ受信側で2つの画面が同時に使用可能であり、一つは教師陣を映し、もう一画面はプレゼンテーション用としてテキストデータや図表の提示に用いた。図-1と図-2に実際の授業の状況、表-1に各ユニットの口頭表現の到達目標(詳細は西郡(2006a)参照)、表-2に実際に行われた授業の概要を示す(表-2)は「計画表」であるが、ほぼこれに沿った内容となっている。

今回の事前研修は9名を対象とした。学習者は前後2列に着席し9人を同時に映すロングショットとなっている(図-2参照)。JICA ネットではこの授業のために384KB以上の相互通信容量が独占確保され、動画音声については一定以上の質と円滑さが確保される。しかし、学習者個々人の表情や細かな行動などは、前列の人々に関しては多少判別できる程度、後列の学習者については大きな動作しか観察できない状況であった。対面型授業としての教育効果の分析については別稿に譲るが、今回の実施を通じて感じられたのは、この程度の見え方の場合でも、それ相応の工夫と配慮を行い、教員側が熟練していけば対面型授業として十分成立し得ることであり、本稿5に示すように(授業そのものについての調査ではないが)学習者から授業を高く評価する意見が表明されている。

無論、遠隔授業で教員に求められる技能や判断力は、実際の対面型授業とは大いに異なる。テレビ会議システムが一般化する中で、新たなコミュニケーションのあり方としての体系化と方法論の整備が求められており社会的要請が高い。この点については、本事前研修のような事例に関するケーススタディの集積が必要であると思われる。

⁵ ベトナム語解説には筆者のうち清水が、練習については清水と藤本が当たっている。また、一部の授業では首都大学東京大学院生、小松恭子君の協力を得た。また、ベトナム語版教科書を作成配布した。

表-1 日本語事前研修-ユニット10までの口頭表現到達目標

(詳細は西郡, 2006a 参照)

Introduction	基本的な挨拶ができる。 授業での基本的な指示語が理解できる。
Unit 1	ごく簡単な自己紹介(名前・仕事)ができる。 相手と自分の名前・国・仕事の確認ができる。 名前・国・仕事についての質問と回答ができる。 0から10までの数を述べ、聞くことができる。
Unit 2	その場にある物の名前を言うことができる。 その場にある物の名前を聞くことができる。 物の属性・言語・所有者を述べ、聞くことができる。 物の所有者について問答ができる。 簡単な依頼ができる。 11から100までの数を述べ、聞くことができる。
Unit 3	場所の名前を言うことができる。 場所の位置について質問し、答えを聞き取ることができる。 時間について質問し、答えを聞き取ることができる。 ものの値段について質問し、答えを聞き取ることができる。 乗り物の料金について質問し、答えを聞き取ることができる。 乗り物の目的地・経過地について質問・確認することができる。
Unit 4	建物での目的地の階について質問し、答えを聞き取ることができる。 (小さい)物の個数について質問し、答えを聞き取ることができる。 個数を指定した買い物ができる。 人や物を特定できる。 大きな数を言い、聞き取ることができる。
Unit 5	目的地への移動などについて基本的な会話ができる。
Unit 6	習慣や未来の行為について基本的な会話ができる。
Unit 7	簡単な勧誘の会話ができる。 簡単な意思確認の会話ができる。 理由を述べることができる。
Unit 8	物の存在や所在について基本的な会話ができる。 物の所有について簡単な会話ができる。 活動についての基本的情報を聞き取り、話すことができる。
Unit 9	人や物について簡単な形容ができる。
Unit10	嗜好や興味、技能について簡単な会話ができる。 希望や欲求について簡単な会話ができる。 能力と可能性についての簡単な会話ができる。 物の授受について簡単なやり取りができる。

表-2 テレビ会議システムによる遠隔授業の概要 (計画表)

1. 7月19日
 学習の進め方、iPodの使い方の説明
 第1課「モデルかいわ・あたらしいことば・ぶんぼうノート」の説明
 ※ 課題 1. iPod 音声ファイルの練習 Unit01-Dialogue, Unit01-NewWord, Unit01-Drill
 2. iPod 画像ファイルの練習 Unit01-Lesson-desu
 3. 第1課「はつおんともじ」(pp. 13-14)自習
2. 7月25日
 第1課「れんしゅう」もじをよむ練習
 第2課「モデルかいわ・あたらしいことば・ぶんぼうノート」の説明
 ※ 課題 1. iPod 音声ファイルの練習 Unit02-Dialogue, Unit02-NewWord, Unit02-Drill,
 2. iPod 画像ファイルの練習 Unit02-Lesson-doko
 3. 第2課「はつおんともじ」(pp. 22)自習
3. 8月1日
 第2課「れんしゅう」もじをよむ練習
 第3課「モデルかいわ・あたらしいことば・ぶんぼうノート」の説明
 ※ 課題 1. iPod 音声ファイルの練習 Unit03-Dialogue, Unit03-NewWord, Unit03-Drill,
 2. 第3課「はつおんともじ」(pp. 31)自習
4. 8月8日
 第3課「れんしゅう」もじをよむ練習
 第4課「モデルかいわ・あたらしいことば」の説明
 ※ 課題 1. iPod 音声ファイルの練習 Unit04-Dialogue, Unit04-NewWord
 2. iPod 画像ファイルの練習 Unit04-Lesson-kono, Unit04-Lesson-nangai
 3. 第4課「はつおんともじ」(pp. 40)自習
5. 8月22日
 第4課「れんしゅう」もじをよむ練習
 第5課「モデルかいわ・あたらしいことば」の説明
 ※ 課題 1. iPod 音声ファイルの練習 Unit05-Dialogue, Unit05-NewWord, Unit05-Drill,
 2. iPod 画像ファイルの練習 Unit05-Lesson-ikimasu
 3. 第5課「はつおんともじ」(pp. 48)自習
6. 8月29日
 第5課「れんしゅう」もじをよむ練習
 第6課「モデルかいわ・あたらしいことば」の説明
 ※ 課題 1. iPod 音声ファイルの練習 Unit06-Dialogue, Unit06-NewWord, Unit06-Drill,
 2. iPod 画像ファイルの練習 Unit06-Lesson-masu
 3. 第6課「はつおんともじ」(pp. 54)自習
7. 9月5日
 第6課「れんしゅう」もじを読む練習
 第7課「モデルかいわ・あたらしいことば」の説明
 ※ 課題 1. iPod 音声ファイルの練習 Unit07-Dialogue, Unit07-NewWord, Unit07-Drill,
 2. iPod 画像ファイルの練習 Unit07-Lesson-masenka
 3. 第7課「はつおんともじ」(pp. 60-61)自習
8. 9月13日
 第7課「れんしゅう」もじを読む練習
 第8課「モデルかいわ・あたらしいことば」の説明
 ※ 課題 1. iPod 音声ファイルの練習 Unit08-Dialogue, Unit08-NewWord, Unit08-Drill,
 Unit08-Dialogue, Unit08-NewWord, Unit08-Drill
 2. iPod 画像ファイルの練習 Unit08-Lesson-aru

ひらがな・カタカナの学習について

ひらがな・カタカナの学習については別途自習用教材を用意するので、基本的に各自自習して下さい。

また、教科書の各課の最後にある「はつおんともじ」を自習しておいて下さい。
 次の時間に簡単な練習を行います。

すでに述べたように本日本語事前研修をブレンド型と称しているのは、もう一つのメディアがあるからである。もともとは、上記の遠隔対面型授業に加え、動画や音声素材をふんだんに盛り込んだマルチメディア教材を LMS (Learning Management System) の統制のもとでインターネットまたはイントラネットで配信し、PC による eLearning を行う予定であった（先述の通り、平成 18 年度行われた台湾との遠隔教育プロジェクトではこの方法がとられている）。しかし、これを実現するには相手側の都市であるベトナム・ハノイでの通信インフラの問題があった。ハノイであっても学習者が同一の教育機関等に所属していれば上 PC による eLearning を実施できる可能性はあったが、今回の学習者は、所属する組織も異なり、またすでに実務を行っているため、インターネットに接続した PC のある場所まで通い、そこで PC を日常的に使用するのは極めて困難である。表-3 にアジア各国の固定電話、移動電話、PC、インターネットの普及率を記すが (ITU, 2005)、PC とインターネットが日常的に使用できるインフラが整っている国と地域は、アジアでは、日本・韓国・シンガポール・台湾などに限られているというのが実情であろう。PC とネットワークを用いた eLearning には、通信インフラの整備という前提があり、デジタル・デバイドの問題がある。今後、eLearning を本学日本語教育学教室としてアジア各国に展開して行く計画であるが、デジタル・デバイドの問題を見極めながら進めて行くことが肝要であろう。

このデジタル・デバイド問題の解決の一つの方法として mLearning が注目されている。国際通信経済研究所 (2006) によれば、mLearning の利用は、現在以下の二つに二極化しながら大きく拡大している。一つは、eLearning の基盤がすでにあり、より一層のモビリティを求めて、既存の PC ベースの eLearning プロジェクトへ組み込む形での利用であり、WEB 上での情報集積や作品完成のためのコラボレーション (共同作業) 用のツールとして移動電話 (携帯電話、PHS 等) や、PDA、iPod などが利用される場合である。この代表的例としては、携帯電話を利用した clippicKids プロジェクトが挙げられる。このプロジェクトは、児童が野外活動を通して携帯電話でとった画像を WEB 上で集積・公開することを中心にしたものであり、コンピュータや携帯電話のブラウザ等で集積したものを閲覧

できる⁶。

表-3 2005年におけるアジア各国の各種通信サービス普及率
(ITU Telecommunicatio Indicator, 2005) *は2004年のデータ

国名	固定電話	移動電話	PC	インターネット
バングラデシュ	0.38	6.35	1.19	0.22
ブルネイ	24.25	56.26	8.47	15.30
カンボジア	0.26	7.55	0.26	0.28
中国	26.63	29.90	4.08	8.44
香港	53.89	122.65	59.26	50.08
インド	4.43	6.89	1.54	5.44
インドネシア	5.73	21.06	1.36	7.18
日本	48.82	73.97	54.15	50.20
韓国	49.17	79.39	54.49	68.35
ラオス	1.27	10.77	1.69	0.42
マレーシア	16.79	75.17	19.16	42.37
モンゴル	5.90	21.05	10.98	5.79
ミャンマー	0.54	0.34	*0.60	*0.12
ネパール	1.65	0.92	0.47	0.41
パキスタン	3.43	8.30	4.66	9.67
フィリピン	4.16	39.50	4.46	5.32
シンガポール	42.65	101.38	*62.20	57.87
スリランカ	6.00	16.21	2.72	1.44
台湾	59.57	96.99	52.78	58.01
タイ	11.34	26.06	5.83	11.03
ベトナム	18.73	18.73	1.26	12.72

⁶大分大学・竹中真希子研究室 (<http://www.oita-u.ac.jp/01oshirase/koho/koho-10/koho10-13.html>)

また、上越教育大学では、大学を中心に地域の小学校の教員と児童が教材作成のコラボレーションを行い、iPod を用いて、野外の現場等で作成された教材（画像・動画など）を閲覧する活動などを行っている⁷。

mLearning 拡大のもう一つのタイプは、eLearning を含む教育環境が劣悪で、電子機器全般の普及率が低く、一般に用いることのできる機器が低機能かつ高価、また無線通信インフラが発達していない比較的辺鄙な地域での教育そのものの入り口としての利用である。特に無線通信インフラの整備の方が有線よりも設備投資が少なくて済み、PC よりモバイル機器の方が廉価であるため、急速に拡大している。例としては、フィリピン・タイ・インドネシアなどで、小規模な試みが拡大していることなどがあげられるが、大規模プロジェクトの報告は今のところ見当たらない（国際通信経済研究所、2006）。これからの発展が予想・期待されている。

今回の日本語研修の実施計画時に遭遇したのは、後者に関連したものであった。今回のベトナム・ハノイの学習者はPC とインターネットを利用した eLearning はインフラ上困難である。ただ、携帯電話にしても普及率はそれほど高くない。特に、今回 elearning 用に整備して来た素材は動画が多く、現行の携帯電話機能では対応できない。こうした問題に対してとしてとられた措置が、教材をインストールした iPod の貸与という方法であった。

4. iPod とポッドキャスト、ビデオキャスト

今回の iPod 利用の具体的説明に先立ち、iPod とポッドキャストに関する最近の流れについて簡単に触れておく。これらの流れは上記の二極化で言えば、PC とインター

⁷ 2006年8月Apple Education Seminarでの上越教育大学長、渡邊隆教授の講演による。

ネットが日常的に使用できるインフラが整っている国と地域での進展である。

音楽業界ではApple社のiPodとiTunes（無償ダウンロード可）が先駆けとなり、楽曲をネットで配信、課金するという変革が起こった。こうした配信はApple社だけでなく、様々な企業サイトで行われている。iPod向けの配信がポッドキャスト（iPod+Broadcastの造語）である。ポッドキャストでの配信は音楽（音声）だけではなく、MPEG4という圧縮技術によってビデオを配信することも可能となったため、いろいろな展開をみせている。携帯できる利点から、音楽だけでなく、語学教材やニュースなどの音声情報、趣味などのビデオレッスン、さらに映画の配信も開始された（ただし映画については現在アメリカ国内のみ）。2006年から、東京大学の一部授業の映像を無償公開する「東大ポッドキャスト」が始まったことも話題になった⁸。また、各プロバイダでは、ポッドキャスト付きブログサービスを行っているところもあり、個人による音声と動画の配信も可能になっている。図-3にiPodでの動画の再生の様子を示す。また、ポッドキャストとビデオキャストの語学教育での利用については、西郡（2006b）を参照されたい。さらに、本報告でのビデオを含め、一部の素材の一般向け配信も試験的に行っているのでURLを記す（<http://japanese.human.metro-u.ac.jp/podcast/list.html>）。



図-3 iPodでの動画再生

（今回用いられたビデオクイズ
が映し出されている。）

⁸ <http://ocw.u-tokyo.ac.jp/podcasts/index.html>

5. 本研修での iPod を利用した mLearning の態勢と学習者の評価

本研修ではこれまで述べて来た背景のもとで東京都が貸与する形で iPod が利用された。ビデオと音声のファイルは西郡(2006a)に示したイントロダクション及び15ユニット分(音声ファイル162、ビデオファイル94)であり、すべてをインストールした上で貸し出した。実際の授業進行中、自習としてどのファイルを視聴するかは教師側から指示される(表-2)。WebによるeLearningであればドリルやクイズで、学習者の反応に応じて必要な資料に飛んでいたり、クイズの正誤のフィードバック等が得られる双方向的(インタラクティブ)な練習が可能であるが、今回の iPod 教材では、再生のみの機能となっている。iPod でも双方向的なプログラミングはある程度可能であるが、今回は時間的に間に合わなかった。また、現地 JICA 事務所に iTunes 搭載の機器(Apple社 iBook)を1台設置して、音声・動画ファイルをインストールしておき、貸し出した iPod 内のファイルの損傷・不具合などが発生した場合、iPod を接続しさえすれば全ファイルの自動復旧ができる態勢をとった。これは、現地ではインターネットによるポッドキャストとビデオキャストができないための措置であったが、実際には損傷や不具合は起こらなかった。

iPod 貸与についてはこの他にも留意した点がある。まず、盗難等の問題である。PCに比べると遥かに廉価とはいえ、機器は日本円で3万円を超える価格である。経済成長目覚ましいベトナムとはいえ、この価格はサラリー数ヶ月分に相当する⁹。また、アメリカや日本では iPod をよく目にするが、ベトナムではほとんど見ることがないという(現地 JICA 事務所やベトナム人関係者からの連絡)。相当貴重で珍しいものであるため、外部に携帯する際には警戒を要すると思われた。さらに、途上国全般に著作権関係の意識が薄いため、教材内容が無断で複製されることも懸念された。このため、貸与開始時に、取り扱いと著作権に関する注意書を添え、熟読の上で遵守してもらうこととした(遵守

⁹ 日本貿易振興機構(Jetro)のWEBページによれば、2005年国民一人当たりの名目国内総生産(GDP)は、ベトナムは611.9米ドル、日本は35,922米ドルとなっている(<http://www.jetro.go.jp/biz/world/>)。

に関する署名も得た)。

このような措置の上で、iPodによるmLearningが行われた。iPodの操作については遠隔授業の初日に相当の時間を取り、全員が習得できるべく指導を行っている。iPodの使用は、事前研修期間中続けられた。

以下の表-4に、研修開始後2ヵ月弱たった段階で学習者全員に対して行われたアンケート調査について記す。

表-4. ベトナム遠隔授業アンケート iPodについて (回答者9名)

<p>質問1. iPodを</p> <ul style="list-style-type: none">a. 今回初めて使った。(8名)b. 使ったことがある。(1名)c. 自分で持っている。(0名)
<p>質問2. iPodの使い方は</p> <ul style="list-style-type: none">a. 簡単だった。(0名)b. そんなに難しくなかった。(2名)c. 難しかったが、今は問題ない。(7名)d. 難しく、今もまだ使い方がよくわからない。(0名)
<p>質問3. iPodのいい所・便利などを書いてください。(自由記述)</p> <p>いつでもどこでも聞くことができます。きれいな発音で、聞きやすいです。 iPodを使った日本語学習は非常に便利で、日本語のきれいな発音を聞くのに役立ちました。 iPodを使った日本語学習は非常に便利で、日本語のきれいな発音を聞くのに役立ちました。 iPodは、日本人のきれいな発音だけでなく、直接対話や習慣、態度、行動様式なども見ることができ、日本語学習にとっても相応しいと思います。 きれいな発音や直接対話を聞くことができたり、勉強の仕方や日本人の習慣、態度などにも触れることができ、日本語の学習にとっても相応しいと思いました iPodは、日本語の学習にとっても相応しいと思います。日本語を学習する上で、わかりやすくきれいな発音が聞けます。iPodのよいところは、日本語のイントネーションが聞きやすいことです。 iPodを通して、日本語の発音の仕方、話し方が徐々に理解できるようになりました。 iPodを利用した勉強はともにも便利だと思いました。リスニングや発音の練習に役立ちました。 色々な場所で自習ができるので勉強の時間を多く持つことができました。音声はきれいでした。予習にとっても役立ちました。</p>
<p>質問4. iPodの不便などを書いてください。(自由記述)</p> <p>早くて音の区別が難しいです。 iPodを使った日本語学習に短所は特になくと思います。 iPodを使った日本語学習に短所は特になくと思います。 短所は特になくと思います。 悪いところは何もありません。とても素晴らしい機械です。</p>

短所は何もありません。日本語の学習と発音練習にとてもよいと思います。
短所は特になくと思います。日本語の勉強にとてもよいと思います。
特に短所はないと思います。
グループにしたがって直接練習することができません。誤解しても間違いを直してくれません。

質問5. iPodを使った学習について、感想を自由に書いてください。(自由記述)

毎回の学習時間が短いです。
今回の遠隔日本語学習は実によく工夫されていて、先生方も熱心で、とても感動しています。心からお礼申し上げます。
遠隔日本語学習の方法はよく工夫されていて、先生方も熱心で、とても感動しています。先生方の気持ちに応えられるように一生懸命勉強します。心からお礼申し上げます。
はじめて日本人から日本語を習いましたが、今回の遠隔プロジェクトでの日本語授業は素晴らしく、日本の先生方もとても明るく熱心だったと思います。
はじめて iPod と遠隔システムを利用して日本語を勉強しましたが、先生方も熱心にわかりやすく解説して下さい、とても素晴らしかったと思います。心からお礼申し上げます。
遠隔教育プロジェクトを通して、初めて日本人と触れることができてとてもためになりました。先生方も明るくて熱心で感謝しています。
日本語の勉強や発音の練習にとてもよかったです。
遠隔教育での学習はとても工夫されていました。先生方はとても熱心に教えて下さいました。先生方はじめ私達に協力してくれた人たちに応えられるよう精一杯頑張ります。心よりお礼申し上げます。
教授法がしっかりしていて質が高かったです。教師は優秀で熱心でした。しかし、時間が短かったので、多くの知識を得ることができませんでした。

この調査を見ると、学習者からの iPod への評価は極めて高く、特にビデオの動画情報があることで、日本人の実際の言語行動（動作などを含むものと思われる）に関する学習に役立ったことが示されている。また、操作性や音質に関しても問題はない。質問3では欠点を指摘してもらった。このうち発話が速すぎるという指摘は、音声素材をナチュラルスピードに近いものにしたためであろう。電子機器の場合、くり返し再生することが容易なため、むしろ初めからナチュラルスピードにして、実際の会話音声に慣れてもらおうという教育的配慮からのものなので、その周知が必要だったかと思われる。「グループに従って練習できない、さらにどれが正解か分からない」という指摘は今回の mLearning の限界を示し、注目に値する。今回は、eLearning とは異なり、教材間の様々なリンクや正誤のフィードバックなどのインタラクティブ性が十分にとられていない。iPod でのインタラクティブ性の拡張性による教材内容の向上が今後必要となる。また mLearning 全般で用いられる機器は、スマートフォンや次世代 PDA などが求められ

て行くことを示すコメントだと思われる。

6. 終わりに

今回の事前研修は、教育工学的な試行としては、全般として成功し、学習者からの評価も高く、テレビ会議システムによる遠隔授業と mLearning を行っていく上での貴重な知見が得られた。ただ、学習者のコメントにあったように、研修期間に限られている点、来日後の研修との継続性や連関性、さらにベトナム現地での対面型授業との連携についてなど、今後検討すべき点も多い。

今年度ほぼ同時期に進行した台北私立教育大学への遠隔授業との諸側面での対比、今後進展するアジアの諸国との遠隔教育プロジェクトに向けた知見集積等、この研究は緒についたばかりである。

【参考文献】

ITU (2005) “Telecommunication Indicator (2004 & 2005)”

国際通信経済研究所 (2006) 『アジア諸国の職業教育における mLearning の可能性』

ジョシュ・バーシン著, 赤堀侃司ら訳 (2006) 『ブレンディッドラーニングの戦略 eラーニングを活用した人材育成』東京電機大学出版局

西郡 仁朗 (2006a) 「アジア技術者育成での事前日本語研修 - マルチメディアと遠隔教育による研修構想 - 」『人文学報』373 号, 首都大学東京都市教養学部人文・社会系, 1-22

藤本かおる (2007) 「eラーニングによる遠隔日本語教育の実施と検証-日本・台湾間、マルチメディア教材による自学自習と双方向テレビ会議システムを利用したブレンディッドラーニング-」, 首都大学東京大学院人間科学研究科修士論文

西郡 仁朗(2006b) 「始めよう! ポッドキャストで日本語」『月刊日本語』12 月号, アルク出版, 20-21